

日本音楽学会 2023 年度音楽関係学術イベント開催助成金（第 2 期採択）
映画上映とシンポジウム「甦る、琵琶映画の響き：大正期の映画・宗教・音楽」
報告記

柴田 康太郎

2023 年 12 月 11 日（月）、早稲田大学小野記念講堂で映画上映とシンポジウム「甦る、琵琶映画の響き」を開催した。早稲田大学演劇博物館演劇映像学連携研究拠点の 2023 年度テーマ研究課題「映画館チラシ」を中心とした映画関連資料の活用に向けた調査研究（代表：岡田秀則）の研究成果を活用しながら、「琵琶映画」というこれまで十分に検討されてこなかった映画の「再現」上映を行ない、近代日本の音楽文化と宗教や映画の交差に光を当てることを試みた。

サイレント時代の映画館では、弁士の語り、囃子鳴物、西洋音楽、そして時に多彩な歌声が響いていたことが知られている。流行歌をまじえた「小唄映画」や琵琶歌をまじえた「琵琶映画」は歌声をとまなう映画の代表格であり、武満徹の《ノヴェンバー・ステップス》でも知られる薩摩琵琶奏者の鶴田錦史も少女時代にサイレント映画に琵琶演奏を行っていたことが知られている。もっとも、琵琶映画については澤井万七美氏による先行研究がありながらも、現存するフィルムや関連資料が確認されておらず、上映の実態は謎に包まれていた。ところが近年、小松弘氏（早稲田大学）のコレクションに、国立映画アーカイブがフィルムを所蔵する『日蓮上人 龍乃口法難』（国活、1920 年、以下『龍乃口法難』）の映画琵琶台本が含まれていることがわかった。今回の催しでは、この歴史的な琵琶歌の台本と映画作品と比較考証し、この台本を交えた琵琶映画上映の「再現」を実現した。会場の都合で平日夜の開催となったが、150 名ほどの方々に来場いただくことができた。

岡田秀則氏のあいさつに続いて始まった第一部のパネル「大正期の映画・宗教・音楽」では、第二部で取りあげる『龍乃口法難』とその時代をめぐって、映画学の見地から紙屋牧子（武蔵野美術大学）と上田学（神戸学院大学）、音楽学の見地から薦田治子（東日本支部、武蔵野音楽大学）と柴田康太郎（東日本支部、早稲田大学）が考察を行なった。紙屋氏は『龍乃口法難』に焦点を当て、この映画の基本的な紹介を交えながら、製作会社である国活がもつ特徴、史跡近くで撮影された聖地巡礼性に光を当てたうえで、同時期の『稲田の草庵』（牧野教育映画、1922 年）と比較して同作の特徴を検討された。上田学氏は、宗教がさまざまに日本映画史を支えていたことを指摘したうえで、演劇博物館所蔵の立正活映資料や神戸映画資料館で近年発見された『鍋かぶり日親』（牧野教育映画、1922 年）をもとに、宗教映画が時にもっていた「グロテスク」な表現の見世物性と、映画が公開された浅草六区の興行街における見世物興行の伝統との関わりを指摘された。

薦田氏の「大正期の琵琶文化」では、『龍乃口法難』が公開された大正期が近代琵琶の最盛期にあたることを背景とともに説明したうえで、琵琶の歴史と宗教、そして近代における日蓮と琵琶との関わり、さらに近代琵琶の音楽様式と、映画琵琶の音楽的特徴やその受

容まで、映画琵琶をとりまく基本事項を的確に示していただいた。最後に企画者の柴田は、映画琵琶の歴史を解説したうえで、第二部の「再現」上映のもとになった映画琵琶台本を所蔵していた日本映画琵琶協会といった映画琵琶師たちの団体の役割を捉えたうえで、この琵琶台本がどのような特徴をもつのかを考察し、再現上映としての見どころや工夫点を説明した。第1部の登壇者にはきわめて短い時間で発表いただくことになったが、密度の高い簡潔な発表によってこの再現上映の導入を的確に行なっていただくことができたように思う。

第2部「琵琶映画の「再現」上映とトーク」では、薩摩琵琶奏者の川嶋信子氏、活動写真弁士の片岡一郎氏、鳴物奏者の堅田喜三代氏の出演により、映画琵琶台本にもとづく『日蓮上人 龍乃口法難』の上映を行なった。この再現上映のもとにした映画琵琶台本に記されているのは、上映中に歌われた琵琶歌の詞章と節づけのみである。資料考証を通して、この詞章は基本的に薩摩琵琶の既存の琵琶歌をもとにしていること、そして琵琶の詞章は映画の要所にのみ用いられていたことがわかった。川嶋氏には既存の琵琶曲《龍の口》の曲をもとに映画のテンポにあわせた演奏を依頼し、琵琶の入らない部分は弁士の片岡氏に台本を復元いただいた。また、サイレント映画上映という現代では弁士の語りとともにピアノや洋楽器のアンサンブルがつけられることが多いが、大正時代の日本映画上映には囃子鳴物といった芝居小屋の音楽実践が用いられることが一般的だった。今回は劇団新派邦楽部の堅田氏に音楽演出を依頼し、劇音楽に則った音楽演出を依頼した。

もっとも、リハーサルのなかで限られた人数で上映を実現するため、資料にない場面にも1か所、既存の琵琶歌を挿入することを試みた。しかしこの試みによって、既存曲をどのようにサイレント映画に合わせるかという大正時代の琵琶師たちのふるまいを試みることもできた。こうした試みは今後の他の作品の上映においても同様の試みが可能である可能性を示すことにもなったとはずである。しかしそうした試みはさておき、今回の再現上映においては、片岡氏が息をふきこむ登場人物たちの息吹、劇の緩急をつかさどる堅田氏の鳴物、そして川嶋氏の凜とした歌声と幽玄な琵琶の音が響く上映体験に客席は引き込まれ、上映後の会場は熱気に包まれることとなった。上映後には第1部の登壇者と第2部の出演者が登壇し、上映の課題や可能性を検討した。

実のところ、はじめに映画琵琶台本を読み、また準備段階でサイレント映画『龍乃口法難』を無音で観たときにはこのような魅力的上映が実現するとは想像しきれていなかった。そうした意味でも、今回の催しは、再現上映という手続きをとおしてさまざまな資料考証を進めるとともに、近代琵琶の文化がどのように映画という新しいメディアと接合されて往時のひとびとを魅了していたかを追体験する得難い機会となった。もっとも、今回上映したような1920年代の作品のすこし後の時代になると、琵琶映画が伴った音楽は、囃子鳴物から洋楽合奏に変化しており、琵琶映画の上映は今回のような形式のものだけではなくと考えられる。音楽文化が交差し、接合されていた多彩な展開を捉えるためには、現存資料を丁寧に読み解きながら、今回のような再現上映を一度実施するだけでわかった気

になるのではなく、具体的な音の響きを検証しながら考察を重ねていく必要があることにも気づかされた。今後もこうした試みを重ねることで、近代日本の音楽文化の忘れられた水脈に光を当てていきたいと考えている。

謝辞

映画琵琶台本を提供くださった小松弘先生、また素晴らしい上映を実現してくださった川嶋信子氏、片岡一郎氏、堅田喜三代氏、イベント運営に協力いただいた早稲田大学演劇博物館・演劇映像学連携研究拠点、そして助成をいただいた日本音楽学会にあらためて感謝申し上げます。